

童

2017年2月28日。

毎年この時期の童に書くことですが、五右衛門風呂前の道(すてきな3人組かし前)に、クロッカスの芽が顔を出しました。毎年、一番に大地の植物が、春の芽を出す場所です。踏まれても除雪されてもどんなにいじめられても、20年以上、必ず毎年一番に顔を出してくれます。春を告げる風物詩です。

あの豪雪も夢のように、雪解けが進んでいます。あちこち白と黒のパッチワークがひろがり、だんだん黒が占領していきます。同じように、子供たちの顔もどんどん黒くなっていくから面白いですね。春の訪れと子供たちの黒のそれが、毎年繰り広げられます。そして、そんな顔で迎えるひな祭り会。特に女の子が、着物姿でひな人形の前でおすまして座っているその顔が黒いのを見ると、思わず微笑んでしまいます。親子雪遊びやひな人形飾り、親子クロカンなどを通じ、季節を親子で共有しながら、季節の移ろいを十分感じていただければ幸いです。

そんな毎年変わらない春の訪れを告げる風物詩の他に、今年は、大地の2階から、美しいピアノのメロディーが流れてきています。直接、ピアノの音を聞くのはずんずんと心に響きますが、ドア越し、壁越し、時には、窓越しに聞くのも、柔らかく聞こえてきて心地よいものです。ぎっくり腰で、床に伏して、本を読みながらピアノの音を聞いているのも、素晴らしい治療となりました。大人の皆さんが、満足してレッスンを終えて帰っていく姿、会話も素晴らしいです。そして、長年、ひどい目に遭ってきたピアノさんも、最高にうれしいことでしょう。何気なく階段越しに聞こえてくるピアノの音は、子供たちにどのように響いていることでしょうか。



そんな新しい音とともに、春の日差し、空気、匂いなどとともに、3月を味わいながら過ごしたいと思います。

【楽な100本 苦勞な1本】

バックカントリーに夢中になっていた頃の雄飛(もちろん、今でも出かけているが、結婚してから、危険な所へは行かないらしい)がよく言っていました。「自分で歩いた距離だけ滑り降りるのがスキーの基本であり、リフトを使わないバックカントリーの魅力でもある」と。

確かにそうだなあ。いままで、何百回(たぶん)となくリフトに乗り、ゲレンデを滑ってきましたが 滑っている爽快感はその瞬間ごとには感じましたが、心にきざまれているかということ、それは違います。リフトに乗りながら見た晴れ渡る景色、リフトの頂上から見た冬の景色、その都度感激はしましたが、滑走したらすぐ忘れてしまって、あのリフトに乗りあの頂上で見た景色が忘れられないというものはありません。登山では、確実に、あの行程で行ったあの時の景色、あの山からの景色が忘れられないということは、多々あります。この違いは何でしょう。

昨日、野乃花のスキーパトロールの仕事ぶりを一度でいいから見ておきたいと思い、素晴らしい天気になりそうな日を選んで、白馬五竜へ行ってきました。百名山五竜岳の麓にあるスキー場で、白馬3山、八方尾根、五竜岳などの絶景が広がるスキー場です。運がいいことに、予想通り絶景が広がりました。リフトで来なければ、この厳冬の冬山の光景を見ることはできないことでしょう。これだけで来た意味がありました。もちろん、アルペンスキーを履いており、白馬の魅力的なゲレンデを滑りましたが、滑っているよりも、景色を眺めていること、休憩所で外を見ながら休んでいる時間の方は長かったです。白馬の魅力は、あの絶景の景色を余ることなく見ながら滑ることが一番かもしれません。天気が悪かったら、どこのスキー場も同じですし、更に子供にしてみれば、アルペンスキーは、どこでも爽快感を味わえたらどこでも同じだと思います。

私の中で今でも覚えて印象に残っているスキー。それは根子岳バックカントリー、三田原山(妙高山)バックカントリー、そして、数々行った鏡池クロカンや大地クロカン大会などです。雄飛に初めて連れて行ってもらった妙高杉野原スキー場最上部から歩き始め、雪崩の危険を感じながらひたすら登り続けて、一気に新雪の樹林帯を下ってきたスキー。登り2時間以上、下り滑走30分でした。同じく、晴天の中登った菅平根子岳バックカントリー。真冬の根子岳の山頂に居ることは夢のようでした。こちらも登り3から4時間、下り30分ぐらいでした。

一昨日の大地親子クロカン。土手を登り、リング畑を登り降りし、田んぼの土手や斜面を転げ落ち、急斜面をジグザグに汗を流しながら登り、着いた小高いリング畑での昼食。バックカントリーさながら、丘を下り丘を登り、道なき雪野原、藪、雑木林をくぐり抜け、山を登り歩いたクロカン、自分の足で歩いたその距離、場所、景色、満足感など。すべてが鮮明に、その時のドラマとして、心にそのシーンが刻み込まれています。

リフトなら、何回も容易に同じ場所まで登り、同じ景色を見ることができます。滑降も、うまくすべれなかったら、もう一度、いや何度でもチャレンジできます。しかし、バックカントリーは、苦勞して登ってきた分、その景色、その世界をもう2度とないと思いきや、登山と同じです。そしてその下りの滑降は、魂と全ての思いをその下り一本にかけます。登山も同じです。自分の足で登るからこそ、その瞬間に全てをかけます。リフトやロープウェイで容易に登る登山では、そんな意気込みはありません。同じようなことですが、フィルムカメラとデジカメ。何度でも取り直し、削除できるデジカメ。フィルムに限りがあり、現像にもお金と時間がかかるフィルムカメラ。だから、一枚一枚のシャッターに心を込めていた撮影。失敗しても無駄にしてもいくらかでも大丈夫なデジカメ。全て、楽、安心、簡単にリカバリー、回復、手直し、取り返せる時代となりました。

そう考えると、巷には、ボタン一つで何でもできること、回復できること、取り返せることなどが溢れ、安全安心、能率的、合理的と称して、皆、歩かないで、リフトに乗りましょう、容易に出来ますよ、失敗しても、チャンスはいくらでもありますよ・・・的な傾向に踊らされている時代のように感じます。楽な事には、お金がかかる事が法則です。楽をしたいから、苦勞してお金を稼ぐ。電化製品、車、から始まり、日々の雑多な雑用から生活習慣から遊びなど。人にお願ひする、下請けに出す。短時間で合理的に行く。自分でやらないで他人にお願ひする。遊びたいから、その時間を作るために日々の雑用などをお願ひする。または、生産性を上げるため、合理的にするために、自分の得意分野で生産性をあげるために、時間を他人に作ってもらうためにお金をかける、プラマイを考えたら、その方が得である・・・などなど。そんな傾向で、社会が進んでいるように思います。

育児や子育てもそんな傾向に進みがちです。安心した子育て、子育て環境をよくするために、お金の補助、住宅の補助、長時間の預かり、痒い所全てに手が届くような補助や環境設定。安心な子育てが、楽なそれと一緒に感じます。楽な子育てよりも、充実した心に刻まれる充実感のある子育て、子どもと共に、必死に歩んだ子育て、育児は、人生80年の中で、子どもからうれしい、楽しい、苦勞、悲しみ、喜び、感動などを唯一無二いただける一度だけの機会です。子どもと共に本当に充実した人生の時期があったという代替えのない子育て時代。

楽なリフトにたくさん乗るよりも、時間がかかっても、共に歩き、苦勞して、悩み、汗をかきながら、子育てという最高の一本のシュプールに魂を込めて滑って行きませんか!!